

6月6日 キリストの聖体

創 14:18～20 Iコリ 11:23～26 ルカ 9:11b～17

1. ルカ

v.16 「すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡して群衆に配らせた。」

イエスが群衆に食べ物を与えられたこの奇跡物語りは、すべての福音書において一つの神学的な主題、すなわち感謝の典礼と結びつけて語られています。それは天におけるメシア時代の饗宴の先取りであり(典礼憲章 8)、贖われた民を終わりの日に復活させる(ヨハ 6:54)「感謝のいけにえ」(ミサ典礼書の総則前文 2)の奉献であります。

イエスは当時のユダヤ人の食事の習慣に従って「賛美の祈りを唱え」、群衆にパンと魚を配らせました。それは私たちのミサで、供えものの準備のときに唱える“パン(カリス)を供える祈り”に今も受け継がれています。

司祭：神よ、あなたは万物の造り主、ここに供えるパン(ぶどう酒)はあなたから頂いたもの、大地の恵み、労働の実り、わたしたちのいのちの糧となるものです。

会衆：神よ、あなたは万物の造り主。

奉納の歌が歌われるのは、供えものが祭壇に置かれるときまでであることと(総則 50)、その後のこの祈りの言葉は、ミサの本質的な出来事は“まさに今これから始まる”のであって、これは“準備”に過ぎないのだということを示そうとしています(コンクマン/ミサ pp.231-2 参照)。

私たちが聖書を学ぶことを、ミサを考えることから切り離して、それとは独立した宗教思想や道德などを、そこから創り出すことのように思ってはならないことを、ここで強調しておきましょう。

2. Iコリ

現在カトリック教会で用いられているミサ典礼書には、四つの奉献文が収められていて、各奉献文における主の言葉は同一であるように定められています。主が御自身を“まことの食べ物、まことの飲み物”(ヨハ 6:55)として与えて、感謝のいけにえを制定されました。

このいけにえの奉献は、“聖霊によって呼び集められた会衆全員によってささげられる聖なる努めです。”(土屋吉正/ミサがわかる p.22) そこには司祭の“奉仕の祭司職”と、信者の“王的祭司職”という区別がありますが、記念唱に続く文章の主語が「わたしたち(奉仕者と聖なる民)」となっているように、感謝の祭儀は全教会の共同の行為なのです(総則/前文 4)。ですから、「祭儀全体が、信者の意識的、行動的、充実した参加を促すものとなるように整える必要がある」(総則 3)と、わざわざ強調して述べられています。

浜松教会の主日のミサでは、ほとんどいつも第二奉献文だけが使われていることに、信者はすっかり慣れ切ってしまっているように見受けられます。これはその特徴から、週日または特殊な事情において用いるのが適当であると述べられ(総則 322 ㍀)、ユンクマンも“共同体全体の典礼のためよりも、もっとあっさりした形……”と説明しているものです。総則が第三奉献文を、「主日と祝日には優先的に用いられる」と述べている理由は、ユンクマンによる“これはローマ典礼の伝統と、再発見された奉献文の理想像を、非常に良くまとめたものである”という説明で明らかです。

私たちが1コリのこのテキストに耳を傾けると、上に述べた事柄のどの一つも決して無関係ではないことを、よく考えてみる必要があります。聖書の学びは、私たちが“ミサを生きる”(長江恵司教)ことから切り離してはならない作業だからです。

3. 創

創世記の物語り中で、特にその前後と関係のない独立した断片として、このメルキゼデクの祝福がここに挿入されています。しかし、それが伝承の編集過程でここに置かれた意図を推測すると、一つのメッセージが読み取れます。

アブラハムの時代には、エルサレムはエブス人の町であって、これがイスラエルの手に帰したのはダビデの時代になってからでした(サム下 5:6-10)。しかし恐らく伝承の編集者にとっては、シオンは大いなる神イスラエルの主の都であって、このサレム(シオン)の王からアブラハムが祝福を受けたという重大な象徴的意味こそが、その挿入の意図でありました(詩 132:13-14, 133:3, 134:3)。

同じように、私たちは今は地上で「救いの神秘のために、キリストにおいて感謝しながらそのいけにえをささげる民、キリストのからだと血を受けることによって一つに結ばれる民」(総則/前文 5)ですが、それがやがて将来“御国を受け継ぐための保証”(エフェ 1:14)であればこそ、確かに“信仰の神秘”なのです。

v.20 「アブラムはすべての物の十分の一を彼に贈った。」

“信者の霊的いけにえは、司祭の奉仕を通して唯一の仲介者キリストのいけにえと一つに結ばれて完成する。”(総則/前文 4) 私たちを「天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐ者としてください」(1ペト 1:4)私たちの主イエス・キリストの父である神に、感謝しましょう。

ハレルヤ、アーメン。

6月13日 年間第11主日

サム下 12:7～13 ガラ 2:16～21 ルカ 7:36～8:3

1. ルカ

v.48 「イエスは女に、“あなたの罪は赦された”と言われた。」

v.50 「イエスは女に、“あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい”と言われた。」

カトリック教会は古くから、司教と司祭が信者に罪の赦しを宣言する役務者であるという考えを大切にきて来ました。しかしそのことが、信者への適切な教育を伴うことが極めて稀であったために、罪を赦す権能は昔も今もイエス・キリストのものであるという、最も根本的な事実が見落とされて来たように思われます。「神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」(マコ 2:7)とは、まさにキリスト教会にとっての信仰の大前提であるからです。

キリスト教の信仰宣言の最も基本的な形は、“イエス・キリストは主である”(フィリ 2:11)というのですが、それはイエス・キリストが私を罪から、悪魔から、死とあらゆる不幸から贖ってくださったという事実を承認することに外なりません(カトリック教会の教え p.105 参照)。主イエス・キリストは、私たち信者を悪魔から神へ、死から生へ、罪から義へと連れ帰り、かつ、そこに保ち給う方です。

ここで一つ、注意を喚起しておきたいことがあります。“カトリック教会のカテキズム”(1476-1478)では“キリストのあがないと功德”が、“マリアやすべての聖人たちの功德”と並列して述べられていますが、両者は決して同等なものではなく、イエス・キリストの贖いと罪の赦しこそが救いの第一の根拠であるということです(ロマ 3:21-28、エフェ 1:7、ヘブ 10:18、イザ 45:17,21-22, 47:4)。この“罪深い女”(v.39)も、いささかも自分や他の誰かの功德によって救われたものではありませんでした。

2. ガラ

v.20 「わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。」

人がキリストによって罪の赦しを受けるということは、決して外面的に、機械的に、司祭が行う秘跡の効果によって与えられるかのように、理解してはならない事柄です。先ずキリストの福音が語られ、聞く人の中に神のことが働いて信仰が生まれることと、罪の赦しは切り離して考えることが出来ません(ロマ 10:8-17、1テサ 2:13)。その上、信仰そのものも神の賜物であって(エフェ 2:8)、決して功德となるような人間の善行の一つではないのです。

“カトリック教会のカテキズム”がその第一編を信仰宣言の解説に当てて、「わたしは信じます」「わたしたちは信じます」ということから説き始めていることに、注目しましょう。カトリック信者の間では、かつてプロテスタントへの対抗意識から、“信仰ではなくて、カトリックの教えを守る”という思考パターンが、通

俗的に支持されて来たように見受けられます。しかし、いったい“カトリックの教え”は、信者が“イエス・キリストへの信仰によって生きる”ためのものではなかったのでしょうか。

カトリック教会を襲っている現代の高齢化とその衰退は、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」(v.20)という信仰が忘れられた、当然の結果であるとは言い過ぎでしょうか。

神父がミサを司ることも、教会が講師を迎えて養成講座を開くのも、「一切はあなたがたのもの」(1コリ3:22)、信者一人一人が「キリストへの信仰によって義とされるため」(v.16)であることを知りましょう。

3. サム下

古代オリエントの王が、「わたしは主に罪を犯した」(v.13)と告白するなどということは、恐らくこの旧約聖書の物語りを外にしては、他に見出し得ないということに気づくと、私たちは感動します。古代一般の王にとっては、外国人の傭兵の一人を抹殺することなど、少しも良心の呵責を感じる必要のないことであったのに、それがイスラエルでは違っていたこと、しかも、そのような王の断罪が聖書に記録されていることの意味を、私たちは救済史の神への信仰を抜きにしては理解することが出来ません。「なぜ主の言葉を侮り」(v.9)という神からの断罪の言葉を、ダビデ王はナタンを通して確かに聞いたのでした。

この同じ断罪の言葉が、現代のカトリック教会に、その教導職と信者と共に、今朝このテキストを通して語られています。私たちが悔い改めるためにも、私たちが信じて罪の赦しを受けるためにも、キリストの福音を聞くことが先ず必要です(マコ1:15)。私たちがその気になりさえすれば、聖書も、信条もミサ典礼書の総則も、すべて手近にあるのです。どれ一つとして天の彼方、海の果てに行かねば手に入らないものはありません(申30:11-14)。私たちは神のことばへと招かれているのです。「聞く耳のある者は聞きなさい。」(マコ4:9)

ハレルヤ、アーメン。

6月20日 年間第12主日

ゼカ 12:10-11, 13:1 ガラ 3:26-29 ルカ 9:18-24

1. ルカ

v.20 「イエスが言われた。“それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。” ペトロが答えた。“神からのメシアです。”」

“メシア(ヘブライ語) = キリスト(ギリシア語)”という呼称を、聖書が語っているように終末的、黙示文学的な意味で理解している人は、カトリック教会では稀であるように見受けられます。ほとんどの人が聖書を自分で読んだことがないというカトリック信者の実態が、その原因の一つであることは当然として、主日のミサで語られる司祭の説教が、そのようなキリストの福音の終末的、黙示文学的性格とは無関係な、いわゆる世俗的な訓話に墮しているための当然の帰結がそこにあります。

御聖堂の中で、祭壇に較べて聖書朗読台が非常に軽んじられており、“神のことばがそこから語られる”という理解が希薄であることは、司祭にも信者にも共通しています。“説教を通して聖伝と聖書から神のことばを聞く”ということが期待されるのではなく、大多数の司祭が聖書を口実に使って“自分の考えや価値判断のようなもの”を述べることに、みんながすっかり慣れきっているということです。

“イエスはキリストである”といういちばん基本的な信仰宣言と、主の受難と復活の事実と、そして“自分の十字架を背負って従う”、すなわち“洗礼によってキリストと共に死に、今や復活の希望に生きる”という三つのことが、決して切り離すことの出来ない結びつきをもって、今朝の福音書のテキストで述べられています。

“私はキリストと共に葬られた”(ロマ 6:3-4、コロ 2:12)という信仰体験から切り離しては、「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って」(v.23)ということは正しく理解出来ないし、「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)という歴史理解から切り離しては、“イエスはキリストである”という信仰宣言もあり得ないのです。

2. ガラ

v.26 「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。」

v.28 「あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」

私たちキリスト者は皆、「聖霊で証印を押された」者であり、「この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証」です(エフェ 1:13-14)。このように“救い”を理解するときだけに、私たちは使徒たちの喜び(フィリ 2:17)に共感し、自らもキリストの苦しみにあずかる喜びを(1ペト 4:13)、また「あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい」(フィリ 2:18)という勧めの言葉を、受け入れることが出来ます。

いったい“御国を受け継ぐ希望”(エフェ 1:18)を信じないで、どうして“キリスト・イエスに結ばれる”など

ということが理解出来るでしょうか。“約束による相続人”(v.29)とされたということを理解しないで、どうして自分は“神の子とされた”(v.26, 4:5-7 参照)などということが信じられるでしょうか。

すべてのキリスト者が“キリスト・イエスにおいて一つ”であるとは、“共に(神の国の)恵みに与る希望において一つ”(ロマ5:2、フィリ1:7)であるという意味なのです。

感謝の典礼で、以前には聖体拝領と呼ばれていたものが、現在では“交わりの儀”となっています。これは外でもなく、神の国の完成における天の典礼を先取りする保証であり、証しです(典礼憲章8)。この場面で、やがて御国を受け継ぐことを保証された“一つの共同体”が、目に見えるもの、人間的に体験出来るものとして姿を現します。

そのように理解することを訓練されていない信徒、また指導することを知らない司祭は、不幸です。

3. ゼカ

vv.10-11 の元来の意味、特に 11:4-17, 13:7-9 との関係については、今日では推測の域を脱することが出来ません。しかし、それが新約聖書の 黙 1:7 に引用されたときから、教会はキリストの受難と復活の出来事を解釈する一つの示唆を、ここに見出して来ました。

ある聖書学者が指摘する エゼ 36:16-28 との類似性、そして今朝の朗読配分におけるような 13:1 との結びつけは、私たちの目を「信仰の創始者また完成者であるイエス」(ヘブ 12:2)に向けさせてくれます。私たちキリスト者の救いは、「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエス」(ロマ 8:34)をまっすぐに「見つめ」(v.10)ることから訪れるからです。

おお、聖なる者たちが(神の国に)凱旋するとき、おお、聖なる者たちが(神の国に)凱旋するとき、
主よ、私もその数の中に入れてください。聖なる者たちが(神の国に)凱旋するとき。

Oh, when the saints go marching in, Oh, when the saints go marching in,

Lord, how I want to be in that number! When the saints go marching in.

ハレルヤ、アーメン。

6月27日 年間第13主日

王上 19:16b,19-21 ガラ 5:1,13-18 ルカ 9:51～62

1. ルカ

v.62 「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない。」

この聖書の言葉から、これまでどれほど多くの人々が感動を受け、私生活や事業のための指針を得て来たことでしょうか。その人にとって、目標や目的が明確であり、それに向かって進む励ましを得たことを感謝しているのであれば、それは素晴らしいことです。

しかし、キリスト者として聖書に耳を傾けることは、そこから神のことは(福音!)を聞くためであることを、私たちは決して忘れてはなりません。実際、多くの人々が聖書から、神のことはではなくて、人生の指針や教訓のようなものを読み取って、……それはしばしば見当外れなものでした……、しかもそれに固執して“いっぱしの主義や主張”を唱えて来ました。そのような中には、狂信的なキリスト教原理主義も含まれています。

“キリストに従う”、“キリストに服従する”という主張が、かけ声としては立派に聞こえても、もしその意味内容が不明確であるなら、それは“肉に従って生きる”(ロマ 8:12-13)ことでしかありません。“自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、従いなさい”(ルカ 9:23)という呼びかけも、“単なる覚悟”だけで、自分の十字架を背負うことの意味が正しく理解されていないなら、キリストにあってはただの“損失”(フィリ 3:7-8)なのです。

“福音理解”が不明確で、“信仰の中身”が曖昧なままで、しかし党派心にかけては人一倍強いというのが俗人の常であることを、vv.53-54からも私たちは思い知らされます(ヨハ 4:20 参照)。エキュメニズムに関する教令 24にある、「あらゆる軽率と無謀な熱心を避けるよう勧告する」とは、恐らくそのような意味であろうと思われます。

2. ガラ

v.18 「しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。」

“自由”(v.1)という言葉は、律法からの解放という意味で使われているのですが、それは近代の自由主義思想のように各国の政治体制の自由とか、現代における良心の自由や信教の自由、さらには職業の自由や社会的・市民的自由といったものを想定しているわけではありません。

ガラ 4:21-31で説明されているように、それは神の約束に与る自由のことであって、その内容は“信仰によって義とされる自由”(2:15-21)、“義とされた者の希望(神の国)が実現するのを待ち望む自由”(5:5)です。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」(2:16)という「自由を得させるために」(v.1)、キリストは私たちを洗礼を通して新しく創造してくださいました(6:14-16、II コリ

5:17)。

「十字架のつまずき」(5:11、IIコリ1:18-25 参照)をあえて受け入れる信仰を鮮明にすること、「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走る」(フィリ3:14) こと、それこそが“鋤に手をかけてから後ろを顧みない”ということなのです。

見当外れな、一見“知恵のあることのように見える”(コロ2:23)、すなわち「肉において人からよく思われたがっている」(6:12)ような「ほかの福音」(1:6-9)を警戒すること(フィリ3:2-11)が、今日のカトリック教会の信者にとって必須であることを、強調しなければなりません。

3. 王上

v.20 「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います。」

これを、今朝の福音書におけるイエスの命令と矛盾すると考える人は、ただの形式主義者であって、自分は未だ福音を理解していないことに気づくべきです。“カトリック教会の教え”や“カテキズム”は、信者をキリストの福音へと導くための手段であって、決して“神のことは = キリストの福音”の代替品、あるいは“信仰による義”に代わる救いの手段のようなものではありません。それを学ぶ信者たちが、「わたしは神に対して生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。…… (今は)キリストがわたしの内に生きておられるのです」(ガラ2:19-20)と、自らの信仰を宣言出来るようになるためです。

v.19 「エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。」

この日から、エリヤの霊がエリシャの上にとどまり(王下2:15)、エリシャはイスラエルのために召された“神の人”(王下5:8)になったのでした。

私たちも、自分の肉に誇る者ではなく、霊に誇る者になりましょう。そうすれば、時が来て、霊から永遠の命を刈り取ることとなります(ガラ6:8-9)。

ハレルヤ、アーメン。